

成沢家 母方三百年の記録

乾坤

乾坤の譜

けんこんのふ

蔵の町から、月の裏まで。

大沼・池上・平山・成沢 — 四つの家の物語 | 2026年7月 編纂

月の裏側から

PROLOGUE

乾は天、坤は地。

——天と地をひとつに。初代宮城県知事が、村田の酒に与えた名。

夜空をどれだけ見上げても、その場所は決して見えない。月の裏側——クレーター「ヒラヤマ」。そこに名を刻まれた天文学者・平山清次は、曾祖母の兄である。

私たちがそのことを知ったのは、染みの浮いた一枚の古い便箋からだった。「丸菱倉庫株式会社 仙台市上杉五丁目」——その社用箋に、ペン書きの家系図が残されていた。描いたのは、およそ五十年前の坂本勝。のちに分かることだが、彼はこの物語の本体・大沼十右衛門の五男であり、便箋の会社そのものの創業者だった。自らの出自を、自らの会社の紙に書き残していたのである。二〇〇三年の梅雨、その下書きを清書した十五頁の書簡が、海老名家から池上雄二——母の兄——のもとへ届く。「以上があなたの御祖父十太郎さんの兄弟姉妹です」。

そして二〇二六年の夏、私たちはその封筒を開き直した。中から出てきたのは、家系図だけではなく、月の裏側の写真。天文学者たちの略歴。そして新聞の切り抜きの余白に残された小さな書き込みが、曾祖母チセと天文学者・平山清次が兄妹であることを、静かに教えてくれた。

月に名を刻んだ天文学者が、曾祖母の兄。フランスの天文学書を訳した学者が、曾祖父。シベリアから生還して大地の石を究めた地質学者が、祖父。そして源流には、三百年あまり「天と地」の名を冠した酒を醸しつづける蔵がある。乾坤一。この一族は、その銘の通りに生きてしまった——天に一人の名を残し、地に酒と石と塔を残して。

そして何より、これは学問の家系である。早稲田の教授、東京大学卒の兄弟たち、理学博士に人文学博士——大沼から池上、そして成沢へと、博士と学者が代々絶えない。星を仰ぎ、大地を掘り、言葉を訳し、人を教える。学びの灯が、三百年、この血のなかで消えなかった。

これは、蔵の町・村田から月の裏側まで続く、母方三百年の系譜の記録である。

本書の構成

見取り図	母方の本流 —— 一本の道（全体図）
第一部 坤（地）	村田と乾坤一／小京都の町並み／富山・宮大工の家／芭蕉の辻／幻の港・野蒜／石の学者・池上茂雄
第二部 乾（天）	星の訳者・大沼十太郎とチセ／月に名を刻んだ兄・平山清次
第三部 人	一族の群像 —— 大沼十右衛門の子らと、その裔たち
資料編	家系図二葉／ゆかりの地 地図／年表／結び・要確認事項・出典

資料の取り扱いについて。本書は家蔵の一次資料（清書版家系図・坂本勝の下書き・2003年書簡全15頁・親族名簿・古稀記念誌抜粋・新聞切抜）を精読し、公開資料で裏づけて構成した。未確定の事項は「要確認」と明記し、推測による脚色は加えていない。

母方の本流 —— 一本の道

THE MAIN LINE

村田の酒蔵から成沢さんまで。 **橙色** = 本流。左は時代。



天と地の酒 —— 村田・大沼本家

KENKON-ICHI



「乾坤一」の書と、蔵の町・村田の家並み。（出典：大沼酒造店 公式サイト kenkonichi.com）

物語の源流は、宮城県南部の盆地の町・村田にある。母方の本家・大沼家は、代々「**大沼新左衛門**」を名のり、**正徳二年（一七一二年）**からこの町で酒を醸してきた。八代將軍吉宗の時代である。当初の銘は「不二正宗」。明治三年（一八七〇年）、視察に訪れた初代宮城県知事・松平正直がその味に感動し、新しい名を与えた——乾坤一。乾は天、坤は地。天と地をひとつに、この世で一番の酒になるように。

蔵は今も生きている。有限会社大沼酒造店、当主は十七代目。宮城の米ササニシキを中心に、麴造りから手仕事の酒造りが続く。ラベルには今も「創業正徳二年」の文字。銘柄には「HEAVEN&EARTH」——天と地——の名を持つ一本まである。戦時中には、東京の親族の家財がこの蔵に疎開した。書簡の差出人は「私も二度訪ねた」と懐かしむ。三百年あまり、家々が困ったときに戻ってくる場所——それが村田の本家だった。



現在の「乾坤一」。左のラベルに「創業正徳二年」、中央は「HEAVEN&EARTH」＝天と地。（出典：大沼酒造店 公式サイト）

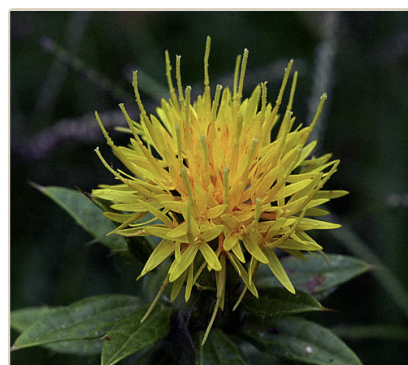
屋号・銘柄	大沼新左衛門／乾坤一（旧「不二正宗」）
創業	正徳二年（1712年）。現当主は17代目
命名	明治3年（1870年）、初代宮城県知事 松平正直
菩提寺（推定）	願勝寺（村田町）※家蔵資料の書き込みより。要現地確認

紅花の道 — みちのく小京都

MURATA



なまこ壁の「店蔵（たなぐら）」が並ぶ村田の町並み。（出典：ウィキメディア・コモンズ／ウィキペディア「村田町」）



紅花。摘むのは棘のやわらぐ夜明け前——「末摘花（すえつむはな）」の異名を持つ。（出典：ウィキメディア・コモンズ）

村田は、江戸の昔から**紅花（べにばな）の集散地**として栄えた。夜明け前、露を含んで棘のやわらいだ花を摘む。仙南の紅花はこの町に集まり、蔵王を越えて山形へ、さらに京の都へ——口紅一匁は金一匁、と言われた贅沢品である。東北の小さな盆地の町が、京文化と直結していた。京に似た三方山の地形もあいまって、村田は「**みちのく宮城の小京都**」と呼ばれる。

紅花商人たちが競って建てた、なまこ壁の土蔵造りの店舗「**店蔵**」と豪壮な表門。その町並みは今も残り、**二〇一四年**に国の**重要伝統的建造物群保存地区**に選定された。紅花商から味噌・醤油業に転じた別家系の「旧大沼家住宅（屋号やましょう）」は国の重要文化財。歴代の村田町長にも大沼姓が並ぶ。大沼という姓は、この町の背骨である。

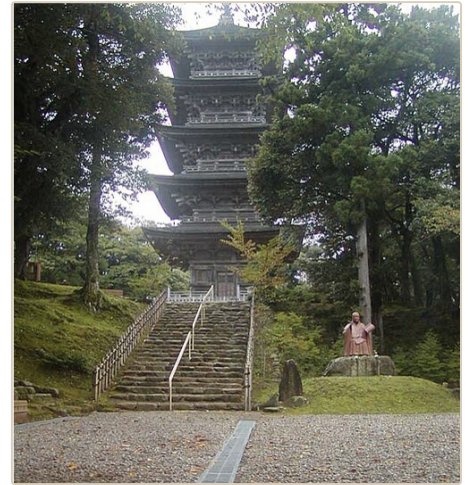
位置	宮城県柴田郡村田町（仙台の南、蔵王の東麓）
江戸期	紅花の集積地。蔵王越えて山形・京と交易
町並み	店蔵＋なまこ壁。2014年 重要伝統的建造物群保存地区
最寄り	JR東北本線 大河原駅（町内に鉄道駅はない）

塔を建てた家 —— 富山の池上

TOYAMA, THE CARPENTER'S HOUSE



国宝・瑞龍寺（富山県高岡市）。加賀藩お抱えの名工たちが建てた近世禅宗建築の最高峰——越中の大工の技を今に伝える。（出典：ウィキメディア・コモンズ／ウィキペディア「瑞龍寺(高岡市)」）



妙成寺五重塔（石川県羽咋市・重文）。江戸初期、北陸で唯一現存する木造五重塔。長茂が手がけた塔の時代の空気を伝える。（出典：同／「妙成寺」）

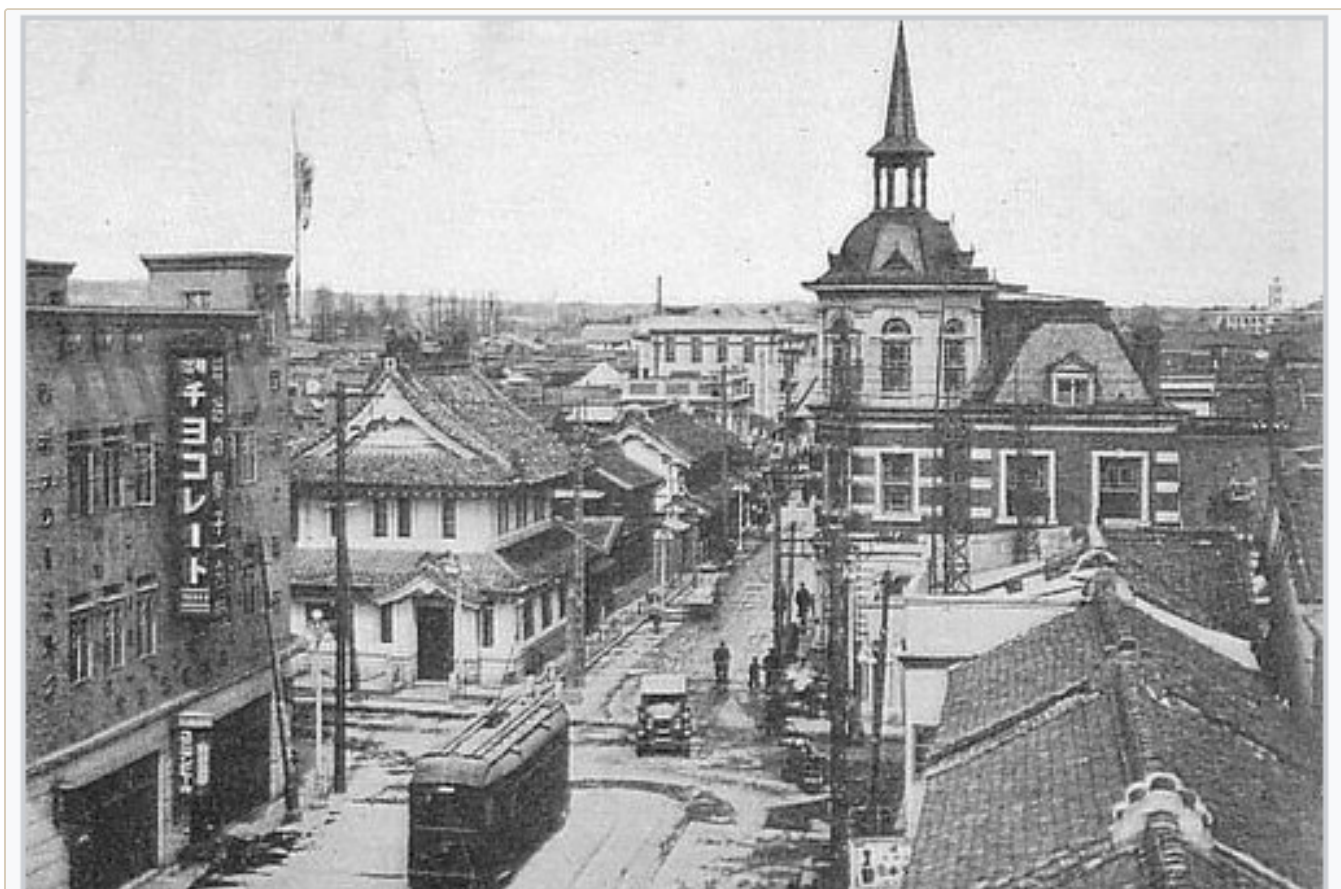
母方のもうひとつの源流・池上家のルーツは、日本海側の**富山**にある。平成十四年の親族名簿は、家祖・**池上長茂**をこう記す——「士族。富山大工組合長。神輿・五重塔を制作」。刀を置いた士族が、宮大工の頭領として塔を組み、神輿を彫った。妻・ゆきの実家は**大島製材所**（のちの大島カメラ店）。木を挽く家と、木を組む家の縁組である。

長茂の長女・みよは辻野家から婿・清吉（陸軍薬剤中佐）を迎え、その子らは空将補・洋吉、グァム島に散った浩吉、金沢に住んだ益吉と、北陸と軍歴に足跡を残した。跡取りの茂太郎から、孫の**茂雄**——のちの地質学者——へと家は続く。

富山の残響（伝聞・要確認）：富山ルーツに関して、島津製作所の田中耕一氏（二〇〇二年ノーベル化学賞・富山市出身）と親戚だと聞いた、という家族の伝承がある。田中氏の育ての父は大工道具（鋸の目立て）の職人と伝わり、大工組合長の長茂と同じ富山の職人の世界に生きた家である。系図上の裏づけは未確認だが、記録に留める。

城下の旦那衆 ―― 芭蕉の辻

BASHO-NO-TSUJI



昭和初期の芭蕉の辻。中央左に楼閣風の商家、右に旧・七十七銀行本店、手前に市電。（出典：ウィキメディア・コモンズ／ウィキペディア「芭蕉の辻」）

幕末から明治のころ、村田本家を出た**大沼十右衛門**は仙台に移り、**芭蕉の辻**で呉服商を開いた。伊達政宗の城下町の、大手門筋と奥州街道が交わる十字路――町割りの基点にして、最大の目抜き通りである。四隅には城郭風の高楼を戴く商家がそびえ、辻には歳市の市が立った。

十右衛門は手広く商い、市会議員などの要職に就いた。書簡は端的に記す――「所謂、土地の旦那衆と云うべきか」。妻・久子との間に十一人の子。長男は学者に、次男・三男は陸軍大佐に、四男は製紙会社の工場長に、五男は倉庫会社の創業者になる。呉服屋の帳場から、近代日本のあらゆる持ち場へ、子どもたちは散っていった。

四隅の楼閣は火災と戦災にすべて失われ、最後の一棟も昭和二十年の仙台空襲で焼けた。菩提寺も戦後、新寺小路から**北山墓地**へ移された。

要確認：十右衛門の店の屋号（明治期の南西角「伊勢屋」との関係）、市会議員在任の記録。

幻の港 ―― 野蒜築港

THE PHANTOM HARBOR



野蒜築港跡（東松島市）。鳴瀬川の河口に開かれた「幻の港」。（出典：ウィキメディア・コモンズ／ウィキペディア「野蒜築港」）

晩年の十右衛門は、ひとつの国家事業に情熱を注いだ。**野蒜築港**——内務卿・大久保利通が構想した、明治政府による**日本初の近代港湾**である。オランダ人技師ファン・ドールンの設計で、鳴瀬川の河口に港と新市街を築き、運河と鉄道と道路で東北全域を結ぶ。東北開発の夢の中心だった。

一八七八年に着工、一八八二年に落成。だがわずか二年後の**一八八四年九月、台風が突堤を砕いた**。再建に要する巨費は工面できず、施設は放棄された。三国港・三角港と並ぶ「明治三大築港」に数えられながら、いまは「**幻の港**」と呼ばれる。

仙台の呉服商が、なぜ港に賭けたのか。紅花を運んだ水運の記憶か、商人としての先見か。夢破れた港の跡は、いま土木学会選奨土木遺産として静かに残る。挫折もまた、この家の近代だった。

事業	明治政府による日本初の近代港湾建設（大久保利通の構想）
設計	お雇い外国人 ファン・ドールン（オランダ）
経過	1878年着工 → 1882年落成 → 1884年台風で突堤崩壊・放棄

百年後の野蒜——兄弟をつないだ海

この話には、百年あまり後の続きがある。十右衛門の曾々孫にあたる成沢の三兄弟——文雄と拓也は、小学校のころはいつも一緒に行動し、弟はいつも兄に守られていた。だが中学に上がると別々の世界ができ、会話することも少なくなった。ふたたび二人をつないだのは、拓也が大学に入ってから始めた釣^{つり}りである。休みの日、車に竿を積み、幼い末弟・恵を後部座席に乗せて、兄弟は海へ通うようになった。

その行き先が、野蒜^{のり}だった。誰も、先祖のことなど知らなかった。曾々祖父が私財を投じて港を夢見た海で、その裔の兄弟は、ただ魚を釣っていた。——先祖が港を夢見た海が、離れていた兄弟をもう一度つないだのである。偶然と呼ぶには、できすぎた場所の一致だった。

継承ノート。十右衛門の「商いと公共」の血は、のちに物流会社を興す曾々孫・拓也に流れた——とりたい（本人たちも認めるこじつけである）。だが野蒜の海が兄弟を再結合させた事実は、こじつけではない。この車中の三人——運転する拓也、助手席の文雄、後部座席の小さな恵——の配置は、三十年後、両親の東京移住でも、会社の承継でも、そっくり同じ形で現れることになる（→現代篇『家族の歩み』『継がれたもの』）。

石の学者 — 祖父・池上茂雄

SHIGEO IKEGAMI, GEOLOGIST

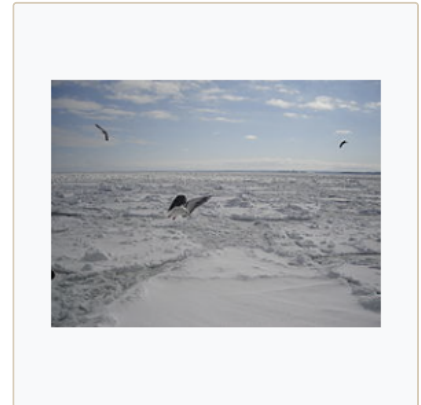
大地の章は、大地を学問にした人で締めくくられる。母方の祖父・**池上茂雄**。明治四十三年（一九一〇年）福島市に生まれ、大阪で少年期を過ごし、山形高等学校から北海道帝国大学で地質学を修めた。鉱山会社を経て満州・鞍山の昭和製鋼所へ。敗戦の年に召集され、そのまま**シベリアに抑留**された。

昭和二十二年、引き揚げ。三十七歳の地質学者が再出発の地を選んだのは北海道だった。洞爺湖畔の中学教師から出直し、北海道学芸大学（現・北海道教育大学）の教授へ。教鞭をとった一つが**岩見沢分校**——娘・光子が生まれた町である。**昭和三十七年、炭田地域の岩石研究で理学博士**。定年後も紋別の道都大学で教壇に立ち、学生たちとオホーツクの川で**オパール（蛋白石）の露出**を見つけて喜んだ。古稀の記念誌に、本人の言葉が残る——「紺碧のオホーツク海を眺めながら、流水の海を友として、人生の最後を楽しく勉強させていただいて居ります」。

茂雄の名は、ひとつの石とともに残る。**玄能石（げんのういし）**——北海道の一部にしか出ない、金槌（玄能）の頭のような形をした不思議な石灰質の結核。手製の標本額には、いまでも彼の手で「北海道教育大学岩見沢分校／池上先生（玄能石研究家）／産地 岩見沢市・三笠市」と記されている。自宅は、岩石と鉱物の標本箱で埋まっていた。天文の家、翻訳の家、そして石の家。理系の学統が、この人でひとつの頂きに達する。

その記念誌の抜粋に、家族の手書きが添えられていた。「**百歳誕生日を祝して**」。シベリアの凍土から生きて帰り、北の大地の石を究め、百寿を数えた人。

傍らには妻・**徳子**——大沼十太郎の長女——がいた。家族の記憶に残る徳子は、麻雀がめっぽう強く、口も達者な「**ゴッドマザー**」。孫たちには「あなたも仙台二高に行くのよ」が口癖だった。早稲田の教授の家に育った人らしい、学問への信頼と勝負師の気風。その血は娘・光子のトランプの強さへ、さらに曾孫・太海のゲームの強さへと流れている——と家族は笑う。次女・光子は九月九日、北海道岩見沢に生まれた（生年は戸籍確認中）。のちに光子が成沢義雄と結婚したとき、茂雄は「**成績が一番と二番の天才同士が結婚した**」と喜んだという。



オホーツク海の流氷（網走沖）。茂雄が晩年を過ごした紋別は、流氷の岸辺の町。
（出典：ウィキメディア・コモンズ）

明治43年（1910）	3月27日、福島市豊田町に生まれる
学歴	大阪市市岡中学校 → 山形高等学校 → 北海道帝国大学理学部地質学鉱物学科
戦前	千歳鉱山 → 満州・昭和製鋼所 → 満州製鉄東辺道支社
昭和20～22年	召集（朝鮮羅南） → シベリア抑留 → 引揚
戦後	洞爺湖温泉中学校 → 北海道青年師範学校 → 北海道学芸大学教授（昭和32年）
昭和37年（1962）	理学博士（北海道の炭田地域に於ける菱鉄鉱質岩石の研究）
研究	専門は岩石・鉱物。とりわけ 玄能石 （北海道特産の結核状石灰岩）の研究で知られた
晩年	道都大学（紋別）主任教授。北広島在住、70歳まで勤務。百寿
2012年（平成24年）	

逝去。享年百二。同年8月25日、孫・拓也と曾孫・太海が病室を見舞った数ヶ月後のことだった

野球と、囲碁と、駄洒落と —— 祖父の素顔

石を究めた学者には、飾らない素顔があった。無類の**高校野球**好きで、いつも北海道代表を応援していた。学生のころは自身も野球部にいた——もっとも補欠で、当時のエースとマネージャーがのちに結ばれた、という話を懐かしそうに語った。孫の**淳二**（山岸家の子）が野球をしていると聞けば、その活躍を心待ちにした。そして北の大地に生きたこの人は、**存命のうちに駒大苫小牧の甲子園初優勝（二〇〇四年、翌年には連覇）**を見届け、たいそう喜んだという。

囲碁も好んだ。相手はいつも、隣に住む娘婿の**山岸力**。言葉遊びも達者で、「英語でいちばん長い単語は floccinaucinihilipilification だ」「まんじゅうは英語で**オストアンデル**——押すと餡が出るから」と、孫たちを煙に巻いた。書斎は岩石標本で埋め尽くされていたが、その棚には、なぜか塩化ビニールの恐竜もずらりと並んでいた。幼い拓也は、この祖父から大きくきらきら光る**硫化鉄鉱（黄鉄鉱）**をもらい、長いあいだ宝物にした。孫が訪ねると、きまって五百円玉を握らせるのが常だった。石の学者は、孫の目には、少しふしぎで、とびきり優しい人だった。

夏に帰る家 —— 北広島

茂雄と徳子が晩年を過ごしたのは、北海道・**北広島**の家だった。拓也にとっては、小学生の夏休みに、父・義雄、母・光子、兄・文雄とともに帰省した、あの北の家である（弟・恵はまだ生まれていない）。白い壁に赤い屋根、庭には木々が茂る。家は**二世帯に連な**っていて、左手には光子の姉・**節子**とその夫・**山岸力**、そして二人の子——拓也のいとこにあたる**陽一**と**淳二**——が暮らしていた。祖父母の家と、伯母の家と。夏が来るたび、いところ同士で北の家に集まった。ひとつ屋根の下に、母方の一族が寄り添っていた。——もっとも、そこへたどり着くまでの、車とフェリーを乗り継ぐ長い旅で、兄・文雄はきまって乗り物に酔ったのだけれど。



茂雄・徳子が暮らした北広島の家（現在）。左手の連結部には、光子の姉・節子と夫・山岸力が住んだ。拓也が幼い夏を過ごした家。（画像：Google ストリートビュー、2022年）

石に埋もれた家と、最後の夏

二〇一二年八月二十五日。拓也は妻・三代子と、幼い息子・太海を連れて、茂雄の病室を訪ねた。ベッドの名札には「池上茂雄様」。百二歳の地質学者は、曾孫の顔を見て、やわらかく笑った。石を究めた人の、最後の夏だった。その数ヶ月後、茂雄は静かに世を去る。天と地のあいだを生きた学者たちの列の、いちばん近い一人が、こう

して大地へ還った。

そして北広島の家で長く茂雄夫妻を支えた娘婿・**山岸力**も、二〇二六年三月、八十七歳でこの世を去った。あの夏の北の家に集った人びとは、一人また一人と、静かに大地へ還っていく。



2012年8月25日、茂雄の病室にて。左から茂雄、曾孫・太海、孫・拓也。撮影は妻・三代子。（家蔵写真）



茂雄自作の玄能石標本額。ラベルに「北海道教育大学岩見沢分校／池上先生（玄能石研究家）」。（家蔵資料）



自宅を埋めた岩石標本の一部。（家蔵写真）

星の訳者 — 十太郎とチセ

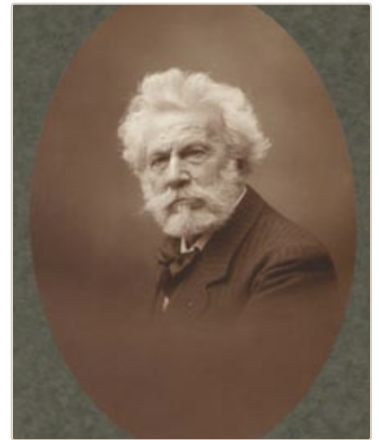
THE TRANSLATOR OF STARS

十右衛門の長男・**大沼十太郎**は、商いを継がなかった。家には「学習院に学び、早稲田で教えた仏文学者」と伝わる（早稲田での在職は資料未確認）。確かなのは、彼が**大正期の科学・天文の翻訳家**だったこと。そして大正十四年（一九二五年）、一冊の訳書を世に出す。カミーユ・フラマリオン著『**死とその神秘**』（アルス刊）——奇しくも原著者フラマリオンが世を去り、十太郎自身もこの世を去った年だった。

フラマリオンは十九世紀フランスを代表する**天文学者**にして、晩年は死後の世界を科学の目で探ろうとした人である。宇宙の構造と、魂のゆくえと。その壮大な問いを、十太郎は日本語に移した。訳書は版を重ね、昭和のはじめ、遠く九州・久留米の親族の書棚にも布表紙のその本があったと、書簡は伝えている。

十太郎の訳業は、それだけではなかった。オックスフォード大学天文台長の天文学者**H・H・ターナー**の『宇宙の旅』、『近代科学二十三講』、『未知の世界へ』、さらに『無線とアマチュア』まで——**宇宙と最新科学を大正の日本に紹介しつづけた翻訳家**だった。星を語る本を、彼はいくたびも日本語にしている。

そして翻訳とは別に、十太郎には**みずから編んだ一冊**がある。『**日露戦史写真帖**』（大正四年・一九一五年）——日露戦争の戦地を写真で記録した大判の写真帖で、海戦、鴨緑江の戦い、南山・得利寺の戦図など各会戦を章立てで収め、附図として戦地一般図も添える。他人の著作を移した訳書とは違い、これは彼自身の**著作**であり、いまも国立国会図書館に上下巻が収蔵されている（同館の著者典拠でも、フラマリオンの訳者と同一の「大沼十太郎」に名寄せされている）。星を訳した人は、時代そのものも一冊に留めていた。



カミーユ・フラマリオン（1842–1925）。パリ郊外に私設天文台を構え、大衆に星を語った。（出典：ウィキメディア・コモンズ、パブリックドメイン）



本文の一例。戦艦や雪中の砲兵など、日露戦争の戦地写真が日英両語のキャプション付きで並ぶ。（写真：現存する実物より）



『日露戦史写真帖』上巻・下巻の表紙（「参謀本部海軍省許可」の文字と旭日の意匠）。大沼十太郎編・著、大正4年。

星の家から来た妻 — チセ

CHISE

そして十太郎の傍らには、妻・**チセ**がいた。旧姓、平山。仙台の家に生まれ、兄は東京帝国大学で星を数えていた——平山清次。宇宙と死を訳した男が、天文学者の妹を妻とした。偶然と呼ぶにはできすぎた縁である。

チセは七人の子を産み育てた。行一、二郎、省三、有伍、徳子、和子、恒子——のちに鉄道省へ、日本橋の書店へ、東京大学へ、製鉄の町へと散っていく子どもたちである。家族の記憶のなかで、チセは新聞切抜の余白の一行——「亡くなられたおばあちゃん（大沼チセ）」——として残る。二人の長女・徳子から、母・光子へ、血は流れていく。

だが、チセその人がどんな女性だったのか——声、面差し、暮らしぶり——を語る資料は、まだ手もとにない。星の兄を持つ妹は、どんな人だったのか。その頁は、これからの聞き取りが埋める。

大沼 十太郎

学習院卒・早稲田大学教授（仏文学）。訳書『死とその神秘』（大正14年）、『未知の世界へ』（大正13年、いずれもフラマリオン著・アルス刊）

妻 チセ

旧姓 平山。平山清次の妹。家族の記憶に「おばあちゃん（大沼チセ）」として残る

子

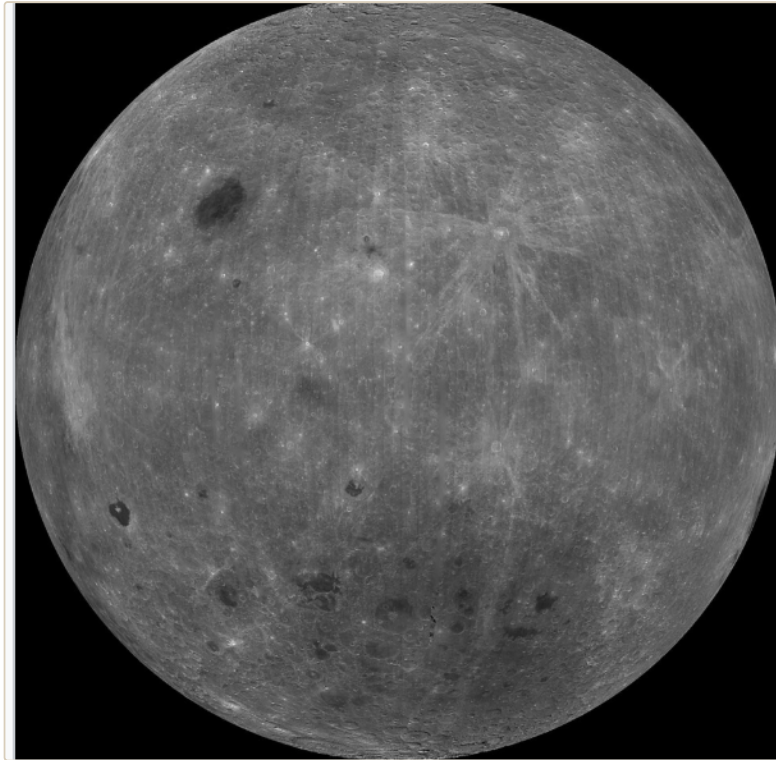
行一・二郎・省三・有伍／徳子・和子・恒子

継承ノート — 語学の血の源流はここか。成沢家では文雄も恵も英語の力が抜きん出ている（TOEICはいずれも九三〇前後）。父母がともに英語教師だったから——が一番近い答えだが、さらに一代さかのぼれば、この家系で最も古い「語学の人」は十太郎である。仏語を自在にし、宇宙の本を日本語へ移した翻訳家。十太郎（仏語）→徳子→光子（英語教師）→文雄・恵、という母方の線と、英語学者・義雄の父方の線。二系統の言葉の血が、英語教師どうしの結婚で合流した——というのが、いまのところ最も筋のよい仮説である（→『義の譜』結び）。

要確認（★取材予定）：チセ＝十太郎の妻であることの最終確認（除籍謄本）。チセの生没年と人柄。母・光子が家で聞いた「おばあちゃん」の記憶。

月に名を刻む — 平山清次

A NAME UPON THE MOON



月の裏側。この面のクレーターのひとつが「ヒラヤマ」と名づけられている。（出典：ウィキメディア・コモンズ／NASA クレメンタイン）

平山清次（一八七四～一九四三）。仙台に生まれ、東京帝国大学教授として小惑星の軌道を追いつづけた天文学者である。一九一八年、無数の小惑星のなかに、同じ軌道の性質を持つ「家族」がある——のちに世界の教科書へ載る「**平山族（Hirayama family）**」の発見だった。米エール大学に学び、日本の天文学を世界の水準へ押し上げた。

昭和四十一年（一九六六年）十月二十八日、讀賣新聞が報じる。「月の裏側の火口に日本人名」。ソ連の月探査で明らかになった裏側のクレーターに、国際天文学連合が日本人の名を付けた——「**ヒラヤマ**」。その切り抜きを、家の誰かが大切に取っていた。余白には、平山清次が曾祖母チセの兄であることを伝える、短い書き込みが添えられている。

小惑星の「家族」を発見した人は、地上の家族のなかでは「おばあちゃんの兄」だった。夜ごと頭上をめぐる月の裏側に、この家の縁者の名が刻まれている。曾祖父は星の本を訳し、曾祖母の兄は星に名を残した。**乾（天）の章**は、この一行の書き込みに尽きる。

確定（家族の証言＋書簡）：平山清次はチセの兄。チセは大沼家へ嫁ぎ「おばあちゃん」と呼ばれた。なお月のクレーター「ヒラヤマ」は、清次と平山信（同姓別家の天文学者）の両者にちなむ。

一族の群像

PORTRAITS OF THE CLAN

十右衛門の十一人の子と、その裔たち。呉服屋の帳場から出て、それぞれが近代日本の現場に立った。

戦場に立った者 ― 大沼の家から

大沼 直輔	陸軍大佐。仙台幼年学校1期・陸士15期（明治37年任官）。日露戦争に山形歩兵第32聯隊旗手として従軍、功五級金鷄勲章（旗手・勲章は家伝）。久邇宮（邦彦王）附武官を長く務めた（官報 大正15年3月3日「補 皇族附武官」）。陸軍大将・多田駿の生涯の親友。
大沼 正輔	陸軍大佐。陸士17期。満州特務機関長・弘前聯隊区司令官（家伝）。陸軍職員表に満洲・第2師団〈昭和6〉、弘前・第8師団〈昭和8〉の在職を確認。
海老名 栄一	陸軍大佐（娘まつの子）。白鷹の農家から陸士20期へ（官報で任官～歩兵少佐を確認）。歩兵第132聯隊長として北支に出征、病を得て仙台で17年の療養ののち昭和23年戦病死（聯隊長・戦病死は家伝）。

戦場に立った者 ― 池上の家から

池上長茂の長女・みよが婿・辻野清吉を迎えた家（母・光子の親戚筋）にも、軍人と自衛官が並ぶ。学問の家系であると同時に、時代の求めに応じて戦地へ立った家でもあった。

辻野 清吉	みよの夫。陸軍薬剤中佐・正五位勲三等。
池上 洋吉	清吉・みよの長男。戦後、航空自衛隊で空将補（恵庭市）。
池上 浩吉	次男。陸軍大尉。グアム島で戦死。
池上 益吉	三男。陸上自衛隊三等陸佐（金沢市）。四男・昌宏は高校教師（富山）。

学問と商いに立った者

行一・省三・雅夫	いずれも東大卒。行一＝鉄道省、札幌鉄道管理局船舶部長。雅夫＝王子製紙の各地工場長（海藤家へ養子）。
坂本 勝	五男。坂本家へ養子。三菱倉庫を経て仙台に丸菱倉庫を創業（昭和27年設立）。会社は現存し（仙台市青葉区小田原）、現代表も坂本姓。五十年前、自社の便箋に家系図の下書きを描いた――本書の系譜はこの一枚に始まる。
二郎	日本橋呉服町（現・中央区日本橋一～二丁目／八重洲一丁目あたり）に書店「図南社（となんしゃ）」を開業。長男が神田駅前で継承したと伝わる（現況は要確認）。
大柿 諒	次女和子の夫。のち新日本製鐵副社長。山崎豊子『大地の子』の「柿田潔」のモデルとされ、著者の取材を受けた。柿田潔は作中の東洋製鉄（新日鉄がモデル）の常務・のち副社長で、ドラマ（NHK・1995年）では宇津井健が演じた。中国残留孤児を描いた国民的小説の登場人物に、この家の縁者の面影がある。

※各人の記載は2003年書簡・親族名簿にもとづく。軍歴等の一部は公文書での裏づけが残る（巻末・要確認）。図南社の正確な所在・現況は未確認。

書肆のあった街 —— 日本橋呉服町、いま

二郎が書店「図南社」を開いた日本橋呉服町は、江戸幕府の呉服師にちなむ古い町名。町名は関東大震災後の区画整理で消えたが、「呉服橋」の名は交差点にいまも残る。母・光子の記憶では「三越前あたり」だが、正しくは呉服橋交差点——現在の中央区八重洲一丁目～日本橋一・二丁目にあたる。



日本橋呉服町があった一帯の現在。中央の印は呉服橋交差点付近。（地図：© OpenStreetMap contributors）



呉服橋交差点のほとりの現在。書店の並んだ町は、いまはオフィス街に変わった。（画像：Google ストリートビュー、2022年）

縁のかたち —— 丸菱倉庫、いま



坂本勝が創業した丸菱倉庫（仙台市青葉区小田原六丁目）の現在。会社は現存するが、登記地はいまは住まいのような佇まい。本書の系譜は、この会社の便箋に描かれた一枚に始まる。（画像：Google マップ）

継承ノート —— 二重に継がれた人、坂本勝。坂本勝がこの一族に残したものは二つある。ひとつは**創業の血**——大手の三菱倉庫を出て、仙台に自分の倉庫会社を興したこと。もうひとつは**記録係の役**——五十年前、自社の便箋に一族の家系図を描き残したこと。そして約一世紀後。曾々孫の拓也は、大手の物流会社を出て自分の物流会社を興し、いま、こうして一族の譜

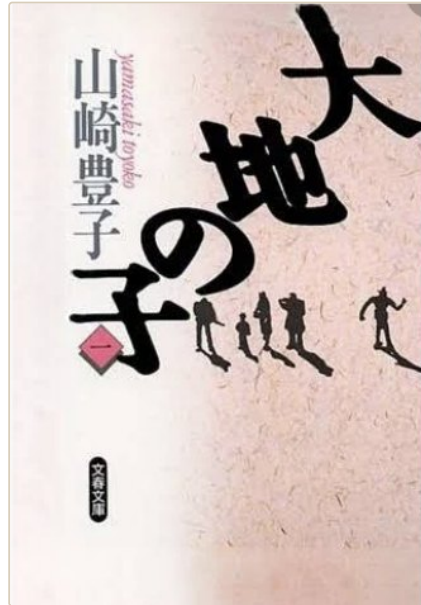
を編んでいる。創業と、記録と。坂本勝の二つの仕事を、同じ一人が知らずになぞっていた。本書そのものが、あの便箋の続きである。

物語になった人 —— 『大地の子』と大柿諒

大柿諒は次女和子の夫で、のちに新日本製鐵の副社長。山崎豊子が『大地の子』執筆にあたり取材した人物で、作中の東洋製鐵（新日鉄がモデル）の重役柿田潔に、その面影が重ねられている。国民的な物語のなかに、この一族の縁者がひそかに立っている。



NHKドラマ『大地の子』（1995年放送）。柿田潔＝大柿諒がモデルとされる。（映像ソフトの書影／出典：オンライン販売サイト）



山崎豊子『大地の子』（文春文庫）。（書影：文藝春秋／出典：古書販売サイト）

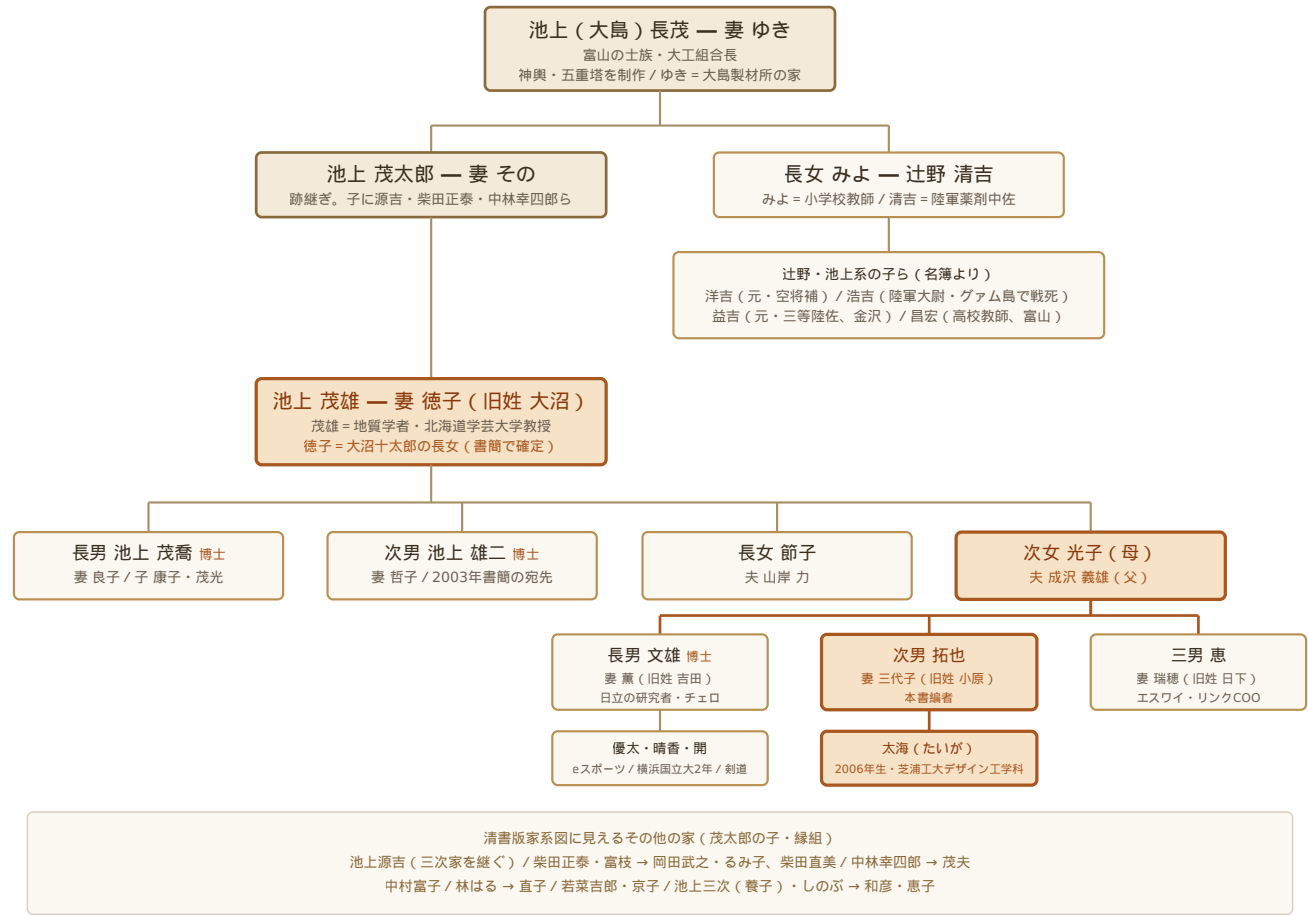


「柿田潔」を演じた俳優・宇津井健。（出典：ウィキペディア）

家系図 ― 池上長茂家

THE IKEGAMI FAMILY

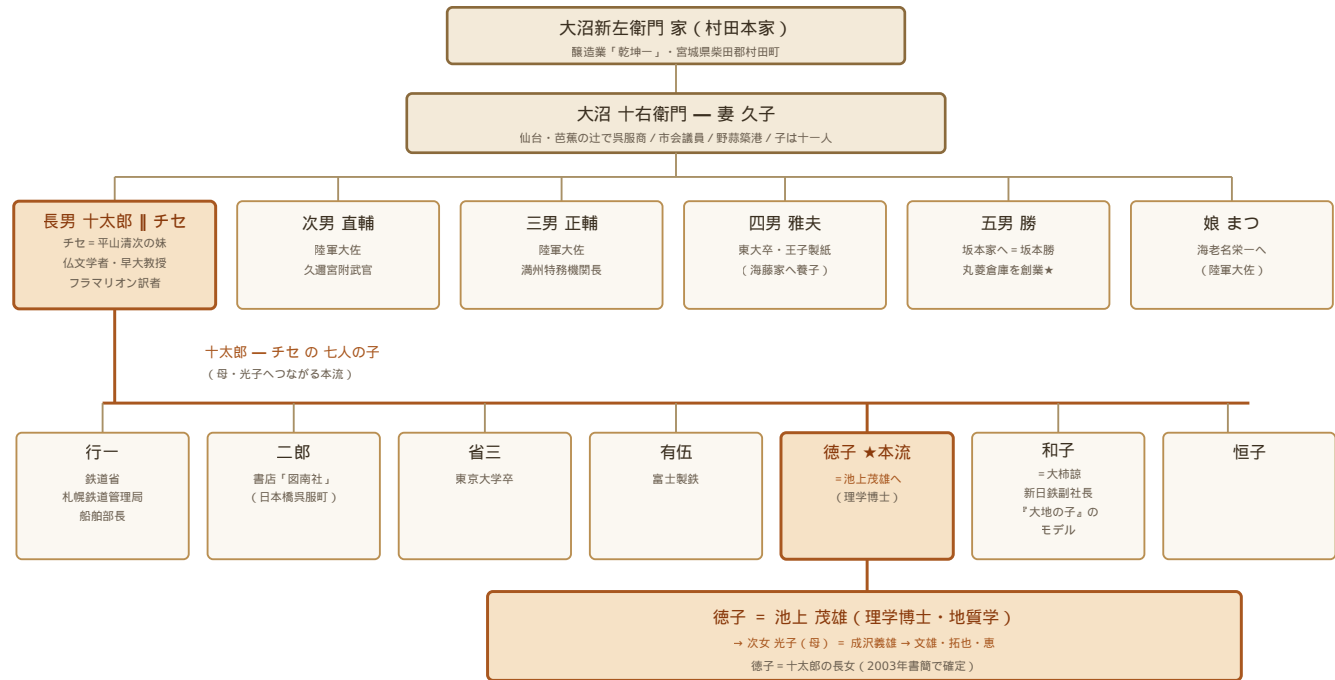
清書版家系図と「池上ミヨ様三十三回忌 親族名簿」（平成14年）にもとづく。橙色＝本流。



家系図 二 —— 大沼本家の直系

THE ONUMA LINE

二〇〇三年書簡（全十五頁）の精読により確定。**橙色**＝母への本流。



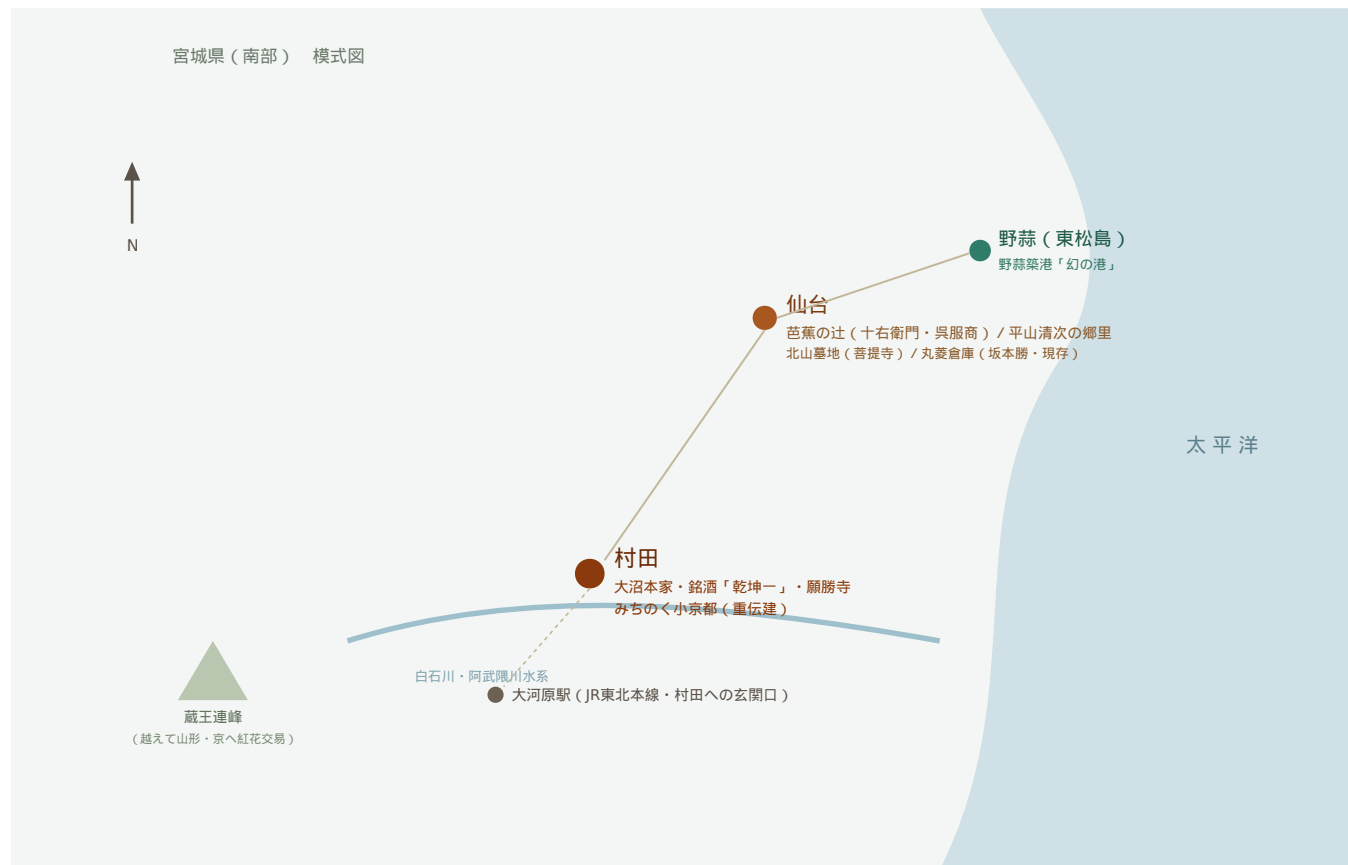
※十太郎とチセの子は七人（行一・二郎・省三・有伍・徳子・和子・恒子）。二郎＝日本橋の書店「図南社」、行一＝鉄道省。
和子の夫・大柿諒は新日本製鐵副社長で、山崎豊子『大地の子』の重役（柿田／垣田専務）のモデルとされる。

確定の根拠：書簡は「以上があなたの御祖父十太郎さんの兄弟姉妹です」「長女 徳子さん——貴方のお母上」と明記。徳子が十太郎の長女であり、雄二・光子きょうだいの母であることは原文により確定した。

ゆかりの地

MAP OF PLACES

物語の主要な舞台（宮城県周辺・模式図）。実際の縮尺・海岸線とは異なります。



地図の外のゆかりの地：富山（池上長茂＝士族・大工組合長の郷里。金沢・富山県福岡町に一族）／福島（祖父・茂雄の出生地）／北海道（茂雄の教育者人生。洞爺湖・札幌・紋別・北広島）／山形（海老名家・茂雄の山形高等学校）／そして月の裏側（クレーター「ヒラヤマ」）。

年表 ―― 家と時代

CHRONOLOGY

家 家・ゆかりの人の出来事 世 日本・世界の出来事

1712（正徳2）	家	村田で大沼酒造店 創業（当初の銘柄「不二正宗」）
江戸期	世	村田、紅花の集散地として栄える（蔵王を越え山形・京と交易）
1868（明治元）	世	明治維新
1870（明治3）	家	初代宮城県知事 松平正直、酒を「乾坤一」と命名
1874（明治7）	世	平山清次、仙台に生まれる（チセの兄）
1878-84	家	十右衛門、芭蕉の辻で呉服商。晩年、野蒜築港（1882落成→1884台風で崩壊）に尽力
1893（明治26）	家	娘まつ 誕生（のち海老名家栄一に嫁ぐ）
1904-05	家	直輔、日露戦争に山形歩兵第32聯隊旗手として従軍（功五級金鵄勲章）
1910（明治43）	家	池上茂雄、福島市に生まれる
1918（大正7）	世	平山清次、小惑星の「族（平山族）」を発見
1925（大正14）	家	十太郎 訳『死とその神秘』（フラマリオン著・アルス）刊行
1926（大正15）	家	直輔、皇族附武官に補される（久邇宮付。官報3月3日・歩兵中佐→のち大佐）
1936（昭和11）	家	徳子、小倉から山形への旅の途中、日本橋で海老名家と面会（書簡の記憶）
1943（昭和18）	世	平山清次 逝去
1945（昭和20）	家	仙台空襲で芭蕉の辻・菩提寺焼失／茂雄、召集からシベリア抑留へ／浩吉、グァム島で戦死
1947（昭和22）	家	茂雄、シベリアから引揚。北海道で教育者の道へ
1952（昭和27）	家	坂本勝、仙台に丸菱倉庫を設立（現存）
1962（昭和37）	家	茂雄、理学博士（炭田地域の菱鉄鉱質岩石の研究）
1966（昭和41）	世	讀賣新聞、月の裏のクレーター「ヒラヤマ」命名を報道（切抜が家に残る）
≡1971	家	坂本勝、家系図の下書きを自社便箋に描く
2002（平成14）	家	池上ミヨ三十三回忌。親族名簿を整理（7月7日）／田中耕一氏（富山・親戚の伝承あり）ノーベル化学賞
2003（平成15）	家	海老名家から池上雄二へ、家系解説の書簡（6月29日付・全15頁）
2014（平成26）	世	村田の町並み、重要伝統的建造物群保存地区に選定
2026（令和8）	家	書簡全15頁を精読、本流を確定。本書『乾坤の譜』を編纂

天と地のあいだに、いま立つ

EPILOGUE

大沼本家（村田・乾坤一）→大沼十右衛門—久子→**長男 十太郎—チセ（平山清次の妹）→長女 徳子**＝池上茂雄→**次女 光子（母）**＝成沢義雄（父）→**文雄・拓也・恵**→優太・晴香・開／太海

見上げれば、月の裏側に曾祖母の兄の名が刻まれている。振り返れば、蔵の町で三百年、天と地の名を冠した酒が醸されている。塔を組んだ富山の宮大工、幻の港に賭けた仙台の旦那衆、シベリアから生きて帰った石の学者——。**乾（天）と坤（地）のあいだ**を、この家の人々は動きつづけてきた。

動いて、動いて、ここにいる。その足跡の総体が、この一冊である。系譜はまだ完結していない。次の頁を書くのは、いまこの譜を手に行っている人だ。

——母方の譜は、次女・光子が成沢義雄に嫁いだこの一点で閉じる。父の家系（成沢家）の物語は姉妹編『義の譜』に、そして三人の息子から続く一家の現代は現代篇『家族の歩み』へと受け継がれる。

確定済み（一次資料・本人確認）：①母＝成沢光子（旧姓 池上）は池上茂雄・徳子の次女。父＝成沢義雄。きょうだい＝茂喬・雄二・節子・光子。②徳子＝大沼十太郎の長女（書簡原文）。③平山清次＝おばあちゃん・大沼チセの兄（切抜メモ）。④下書き家系図の作者＝坂本勝＝十右衛門の五男・丸菱倉庫創業者（会社は現存）。⑤祖父・茂雄の略歴（古稀記念誌）。

博士の絶えない家（母方）。大伯父・大沼十太郎（早稲田大学教授）にはじまり、その弟妹の子には行一・省三・雅夫ら東京大学卒が並ぶ。祖父・池上茂雄（理学博士・地質学、一九六二年）、母の兄・池上茂喬（三菱重工・博士）と池上雄二（工学博士〈東工大〉、一九七九年）——母方だけでも博士と学者が代々絶えない。大沼の酒、平山の星、池上の学問。学びの灯は、明治から今日まで、この血のなかで消えなかった。そして、この灯はいまも消えていない。孫の成沢文雄は日立の中央研究所で自動運転の研究に携わり、二〇一九年、博士（工学）となった（茨城大学・機能安全の検証手法）。茂雄の理学博士から五十七年。約二十年おきに博士が生まれ続けている家である（一九六二・一九七九・一九九五〈義雄・名誉博士〉・二〇一九）。——誰に流れたかの答え合わせは、現代篇『家族の歩み』巻末「継がれたもの」に。

要確認事項（今後の取材課題）

★＝母・光子への聞き取り（二〇二六年七月末に予定）で確認する項目。

1. チセ＝十太郎の妻の最終確認（除籍謄本）。チセの生没年と、どんな人だったか。★
2. 徳子・光子ら各人の生没年（除籍謄本・過去帳）。母・光子の生年（昭和十九年〈一九四四〉九月九日の可能性が高い）は戸籍・本人で確定する。★
3. 十太郎とチセの七人の子（行一・二郎・省三・有伍・徳子・和子・恒子）のその後と子孫。光子が実際に会った人の記憶、年賀状などいまも繋がりのある家系。★
4. 光子の生まれ育ち——岩見沢・北広島の家々の記憶、祖父母（茂雄・徳子）との思い出。★
5. 「大沼新左衛門」と現・大沼酒造店当主の対応、十右衛門の分家の経緯。願勝寺＝菩提寺かの現地確認。
6. 十右衛門の屋号・市議員在任・野蒜への関与の公的記録（仙台市史・地元紙・東松島の資料）。
7. 直輔・正輔の軍歴は公文書（JACAR・官報）で実在と在職を確認済み。残るは直輔の功五級金鷄勲章の授与告示と生没年、正輔の陸士期・最終官職。
8. 書簡差出人（海老名家の方）の氏名。手描き下書き「宮崎県」＝「宮城県」の確認。

9. 【伝聞】 田中耕一氏（島津製作所・ノーベル化学賞・富山市出身）と親戚という話の出どころと、どの家を介した縁かの確認。

出典・図版クレジット

SOURCES & CREDITS

- ・家蔵一次資料：清書版「池上長茂家 家系図」／坂本勝による下書き家系図（丸菱倉庫便箋・約52年前）／平成15年6月29日付 池上雄二宛書簡（全15頁、海老名家より）／「池上ミヨ様三十三回忌 親族名簿整理」（平成14年）／「池上茂雄先生古稀記念誌」抜粋／讀賣新聞切抜（昭和41年10月28日）＋家族メモ
- ・表紙・大沼本家：大沼酒造店 公式サイト（kenkonichi.com）／沿革は宮城県酒造組合（miyagisake.jp）
- ・村田の町並み・紅花・芭蕉の辻・野蒜築港・月の裏・流水・フラマリオン肖像・瑞龍寺・妙成寺五重塔：ウィキペディア各項目（ja.wikipedia.org）／画像はウィキメディア・コモンズ、NASA（パブリックドメイン含む）。瑞龍寺・妙成寺は長茂の作ではなく、北陸の宮大工の技と時代感を伝える参考図版。
- ・大沼十太郎の訳書・著作：国立国会図書館サーチ（著者典拠 00541713）／九州大学リポジトリ掲載論文／『日露戦史写真帖』の表紙・本文写真は現存する実物を撮影／大沼直輔：陸士第十五期生記念誌（昭和館）ほか／丸菱倉庫：企業情報（BIZMAPS・G-Search 等、2026年7月確認）
- ・軍人・公文書（オンライン一次資料調査 2026年7月）：アジア歴史資料センター（JACAR, jacar.archives.go.jp）＝大沼直輔（レファレンスコード C01003835500「皇族附武官 大沼直輔」ほか9件）・大沼正輔（満洲第2師団／第8師団＝弘前ほか4件）・海老名栄一の陸軍職員表／官報（国立国会図書館デジタルコレクション全文検索, dl.ndl.go.jp）＝大沼直輔40件（明治37年任官～昭和22年、大正15年3月3日「補 皇族附武官」）・大沼正輔41件・海老名栄一32件
- ・平山清次：日本天文学会「天文月報」評伝（吉田省子, 2019）／天文学辞典（astro-dic.jp）／池上茂雄（玄能石研究）：北海道学芸大学紀要（1965）・北海道教育大学紀要（1968）／大柿諒＝『大地の子』柿田潔：ウィキペディア・Weblio。以上の検索語・レファレンス・出典URLは家蔵の調査記録「調査履歴_ネット調査ログ（2026年7月）」に集約

※本書は成沢家の私的な記録として編纂したものです。頒布・公開の際は各画像の権利者の利用条件をご確認ください。「要確認」の事項は取材の進展にあわせて更新してください。

編集：成沢拓也——ただし本書は、兄・文雄（構成の提案・考証）、弟・恵（戸籍調査の窓口・現地写真の提供）を含む兄弟三人の協力で編成したものである。